

第49回四日市市美術展覧会 審査講評

【日本画部門】

例年より出品点数は減少していますが、個性的で魅力ある作品が集ったことで、各賞方向性の違う作品を受賞作として選定できました。作品は作者自身。本質を求めて表現を続けてきた者なら、目の前の作品から描き手が何を大切にしているか、何を伝えたいか、作品から読み取れます。受賞作と惜しくも賞を逃した作品の差は、僅かばかりの表現力の弱さだけです。勘違いしてはいけないのは、絵を上手く描こうとし表示訓練のみを続けても上手い絵になるだけ。心を開き、題材と対話するように謙虚な気持ちで感動と向き合ってください。

【洋画部門】

本年より、50号以内という出品規定への変更により、全体的にやや迫りに欠けるのではないかと心配しましたが、秀作揃いで、ほっとしました。その中でも、市長賞の「ピエロの願い」は、出色の作品です。三人のピエロが中央でサクソや太鼓などで楽しそうに演奏しており、窓下の曲線や人物のフォルムと呼応して、音楽が聞こえてきそうです。市議会議長賞の作品は、雪国の雪解け間近の風景であり、二本の雑木の空間からやわらかい陽射しがみられます。この光はまるで聖なる火のようで、待ちわびた春の兆しを暗示しているかのようです。教育委員会賞の作品は、水辺の樹林と砂浜という、どこにでもある風景を丁寧に描写しており、大変見事な表現力です。

【彫刻部門】

昨年の第48回展が中止となった影響か、審査対象応募作品が減少したことは残念でした。そのため、賞の選考は苦慮しましたが、応募者の努力に応えとともに、彫刻部門の今後の発展への期待を込めて、審査対象応募全作品が賞を受ける結果となりました。市長賞、市議会議長賞、教育委員会賞の受賞作は、いずれも作者の平素の精進を示しています。岡田文化財団賞受賞作には、作者の豊かな想像力を感じます。文化協会賞受賞作は、独特の雰囲気なたたえた愛すべき作品です。今回は、より多くの作品が出品されることを期待しています。

【工芸部門】

今年はコロナの影響があるのか、前回より10点ほど出品点数が減りましたが、いずれも力作ばかりで、とても観ごたえがありました。中でも、市長賞〈心のさけび〉は、力のこもった、形にこだわらない自由な造形で秀作でした。今年から新しくクスノキ賞が設けられましたが、工芸部門は比較的、出品者の年齢層が高いため、今後は若い世代の参加を大いに望みます。

【書道部門】

今年度の書道部門の出品数は、前回より14点の増となり嬉しい限りです。漢字75点、調和体13点、かな9点、篆刻1点の合計98点。漢字以外の出品数増を今後期待します。市長賞は行草体3行の作品で、シャープな線質と高い密度から縦への流れを美しく見せています。市議会議長賞は、漢字2行を力強い線と省略の利いた草書でまとめています。余白が美しい作品です。教育委員会賞は、かな横作品、線の切れが美しく、墨継ぎと行間の響が横へ展開して流れを出しています。

【写真部門】

コロナ禍により2年ぶりの募集審査となり、応募点数とその質が気になったが、正しく「杞憂に終わった」感がある。応募点数は若干の減少があったものの、屋外で取材された「意欲作」が寄せられ、審査も楽しいものとなった。さすがに「お祭り」や「芸能」等人々の熱気や賑わいを見せるシーンは少なかったものの、その代わり、対象に寄せる思いの伝わる“プライベートな”良質の視線が感じられた。《帰り路》（市議会議長賞）や、《至福の時》（CTY賞）は、現代社会の一面を穏やかだが的確に伝え、その構図も申し分なかった。市長賞に選出された《ジェントルマン》は、「だまし絵」的な面白味を見せ、写真の楽しさを再認識させてくれる。また、昆虫や動物の表情、草競馬やサッカー、スケートボードの一瞬をとらえた作品も印象的であった。今回の応募作で興味深かったのは、水面に映る風景を画面に採り込んだ構図が数多く見受けられたことである。風景とその鏡像までも取り込むその工夫は、写真を見る愉しみを膨らませてくれた。コロナ禍が収束に向かいつつある昨今、写真を撮影する皆さんには、その制作意欲を存分に発揮していただきたい。